

【特別寄稿】

城西大学の始まり

加藤寛之*

キーワード：城西大学、城西高校、水田三喜男、新藤富五郎、坂戸町

飯能市立図書館は、読売・朝日・毎日の三紙で埼玉県情報を収録したページを、例えば毎日新聞ならば「毎日新聞 埼玉版」の名前で登録して保存しています。読売・朝日も同様です。埼玉新聞は、埼玉県立図書館が埼玉関係データベースに1943年（昭和18年）4月1日から2009年（平成21年）12月31日までの記事見出しを登録してあり、熊谷図書館と久喜図書館でマイクロフィルムから読むことができます。それらで地域の出来事の調査をしていると、思わぬお宝にも出会います。そのお宝から、城西大学の始まりが地元へどのように伝えられたかを紹介します。城西大学ホームページの沿革には、1965年（昭和40年）1月に学校法人城西大学設立認可、1965年（昭和40年）4月に城西大学開設 経済学部経済学科 理学部数学科・化学科開設 とありますので、その前後のことになります。この時代、新聞は元号表記が基本ですから、尊重して昭和レトロ感たっぷりの元号表記で書いてみます。

「毎日新聞 埼玉版」昭和39年5月26日に「坂戸町に城西大学 来年四月に開校式を予定」の記事があります。それには「入間郡坂戸町多和目に私立城西大学（学長水田三喜男元蔵相）が新設されることになった。同大学は城西高校（新藤富五郎校長、東京豊島区千早町）を付属とし、工費五億円で六月二日着工、来年四月開校する」「とりあえず新学期に経済学部二百人、理学部（数学、化学科）百六人（※百六十人の誤植でしょう）を募集するが、将来は体育部、文学部を併設する」「同大学は十一月、八分どおり校舎を建設してから文部省に認可申請をだす」とあります。このときは坂戸町だったこと、名前は「城西大学」で、城西高校との関係、6月2日の着工、設置学部と将来構想なども報じています。

「読売新聞 埼玉版」昭和39年5月26日もほぼ同じ内容で「坂戸町に城西大学建設 来月、起工式行う」があります。こちらは正しく「理学部百六十人。理学部は数学科と化学科に分かれる」となっています。将来計画は「体育、文学の両学部も設置する計画」となっていて同じです。場所は「入間郡坂戸町多和目北折越先に」とあります。「北折越」は小字で「きたおっこし」と読み、「北打越」の表記もあります。場所は、城西大学敷地の北西に接したあたりです。

「朝日新聞 埼玉版」昭和39年5月26日は、起工式を6月2日と報じています。「25日同高校関係者が現地で発表したところでは」とあるので、発表会は城西高校主体で行ったのでしょうか。そして「学長兼理事長には城西高校理事、前蔵相水田三喜男氏が就任することになった」とあります。建設予定に「本部棟3階」もあるのですが、これは着工せずに終わったのでしょうか。

「埼玉新聞」昭和39年5月26日は「坂戸に「城西大学」」の見出しで1面に掲載しています。これ

* 元城西大学広報課長

には「創立委員長は元大蔵大臣水田三喜男氏」「大学完成の暁は、学長に就任する。なお城西高校新藤富五郎校長は同大学創立副委員長となっている」と報じています。

各紙の内容は似ているので、同じ資料が各社へ配られたのだろうと推測できます。

起工式の報道は「埼玉新聞」昭和39年6月3日にあつて、式を2日午前11時に始めています。「新藤富五郎創立副委員長のくわ入れ」とあるので、水田三喜男創立委員長は出席されていないでしょう。

次は設置認可について。「毎日新聞 埼玉版」昭和39年12月24日に「明春から大学倍増 四つの申請が全部認可」の見出しがあります。12月22日の大学設置審議会が埼玉県内へ4つの大学が認可になったのです。埼玉県にはこのときに埼玉大学、獨協大学、東洋大学工学部、女子栄養大学（令和8年4月から日本栄養大学）があり、これに国際商科大学（現 東京国際大学）の新設、短大を基盤とした東邦音楽大学と跡見学園女子大学、そして城西大学が新たに加わることになりました。驚くべきは、この全てが60年たつても健在なことです。通常の業界であれば考えられないほどの堅調ぶりです。

その後の経済発展や各大学の努力はもちろんですが、昭和40年ころには大学進学率の上昇という社会環境の大きな後押しもありました。そのことは城西大学の「建学の精神」にも「近来向上しつつある国民の進学要望に応えるため」と書いてあります。例えば「毎日新聞」昭和39年12月24日全国版ページに「私学の“水まし”見込む 来年からベビーブームの波 大学生17万人を増募」の記事があります。文部省はベビーブームを乗り越えるために、大学の総定員増を構想したのですが、いわゆる水増し入学にも望みをかけたのです。私学の水増しはものすごいもので、記事には「四十年の私立への入学者は定員の1.62倍だったが、この実員と定員の開きは四十年だけだけでなく、従来からあった現象」とあります。この水増し入学対策への国庫補助構想とか定員管理とかはまた別のお話ですから、話を戻しましょう。

いくら社会環境の大きな後押しがあつたとしても、設置認可の見込みが昭和39年末で翌昭和40年4月20日開校というスケジュールは、在職中に学生募集業務を体験した私にとってそのキビシさはハンパではありません。年末年始は高校生も社会全体もお休みで、新年になって4月の開校まで残り3か月間ちょっとでは、どうやって新設大学の学生募集をしたらイイんだ、と思ってしまう。当時、募集担当者はとんでもない努力を求められたはずで。

その結果は「毎日新聞 埼玉版」昭和40年4月22日の「城西大学が入学式 新校舎も完成し」で知ることができます。「坂戸町多和目に建設中だった城西大学（水田三喜男学長）が完成、二十一日入学式を行った」「同日は経済学部、理学部二百人が入学したが、将来は文学部、経営学部、体育学部を併設」云々とあります。実際の入学者数は、経済学部経済学科140人、理学部数学科13人、同化学科22名で計175人だったのですが、報道には2学部で計200人と発表していたのでしょう。将来設置構想の学部で経営学部が増えているのも注目、これは後に経済学に経営学科を設け、さらに経営学部へと発展して実現しています。当初からあつた文学部は、女子短期大学部文学部となって実現しています。もう一つの体育学部は、昭和39年秋の東京オリンピック、昭和41年は埼玉県で多くの競技の全国大会や関東大会が開催され、昭和42年には埼玉国体（秋季大会）開催とスポーツイベントが続いていることから、世間と埼玉県の状況に便乗した構想だったような気がします。仮にそうであっても、体育学部は形を変えてスポーツ系の強化として今日に続いているといえるでしょう。

さて、城西大学の開校時をもっと知るには「埼玉新聞」昭和40年4月20日の全面記事広告（資料

1) が最適でしょう。ここで「埼玉新聞」というのは賢い選択です。三大紙といっても三紙全てを取っている家庭はほぼないので、一紙に広告を出しても他紙購読者には見てもらえません。では、どうするか。開校を知ってほしい対象を家庭でなく埼玉の学校関係者に絞れば、埼玉新聞が最適だったはずです。私はこの選択に気付いたときに“お見事！”と心で拍手しました。その紙面ですが、現在の明海大学歯学部校舎あたりから南にカメラを向け1号館と2号館を収めた大きな写真を載せています。キャンパスや学部学科構成、授業科目、将来構想、学生寮といった記事の中央には、城西大学理事長・学長水田三喜男の名で「お礼とお願い」が載っています。そこには「学問は、それ自らが目的ではなく、あくまで人間形成の手段」と書かれ、「後世のために、私ども教育を天職として」「創立者一同の夢であり」と、創立への自らの関わりについては複数形で謙虚に示しています。記事は通学路の整備にも触れていて「校門から川角駅までには巾十メートルの学校路も開設されることになっており」と書いています。これは正門から川角駅へ東に向かう道の拡幅ではありません。現水田記念図書館を起点に北へ伸びて緩やかに川角駅へ達する、幻の新道のことです。その構想ではキャンパスへの入口は敷地の北側にあり、そこから南へ延びるキャンパス道の左右に校舎を配置する構想だったのです。それだから、上記の全面記事広告には現在の明海大学歯学部校舎あたりから南にカメラを向け1号館と2号館を収めた写真が載っているのです。幻の新道は城西歯科大学（現 明海大学歯学部）にキャンパスが分割されたことで、完全に消え失せました。この校舎配置と学校路の構想は、開校10年後に在生にも配布された冊子『写真でつづる城西大学10年の歩み』（昭和50年11月1日発行）に載っているキャンパスの俯瞰図（図1）でみることができますし、城西大学案内（いわゆる大学パンフ）のごく初期の版にもあったと思います。整備が遅れた学校路ですが、開校から半世紀以上たつてようやく別の形で現われたようです。

今はなくなった1号館と2号館ですが、増改築前の両棟の写真をみると、1階入り口附近に柱で支えるようなロビー構造をもち、全体にはタテ・ヨコにスパッと切ったような窓配置を採用しています。これはモダニズム建築のオフィスビルを意識して設計されたのだと思います。1号館と2号館は、学生には上質の建物で学んで欲しいとの創立にかける想いが込められた教室棟だったのです。

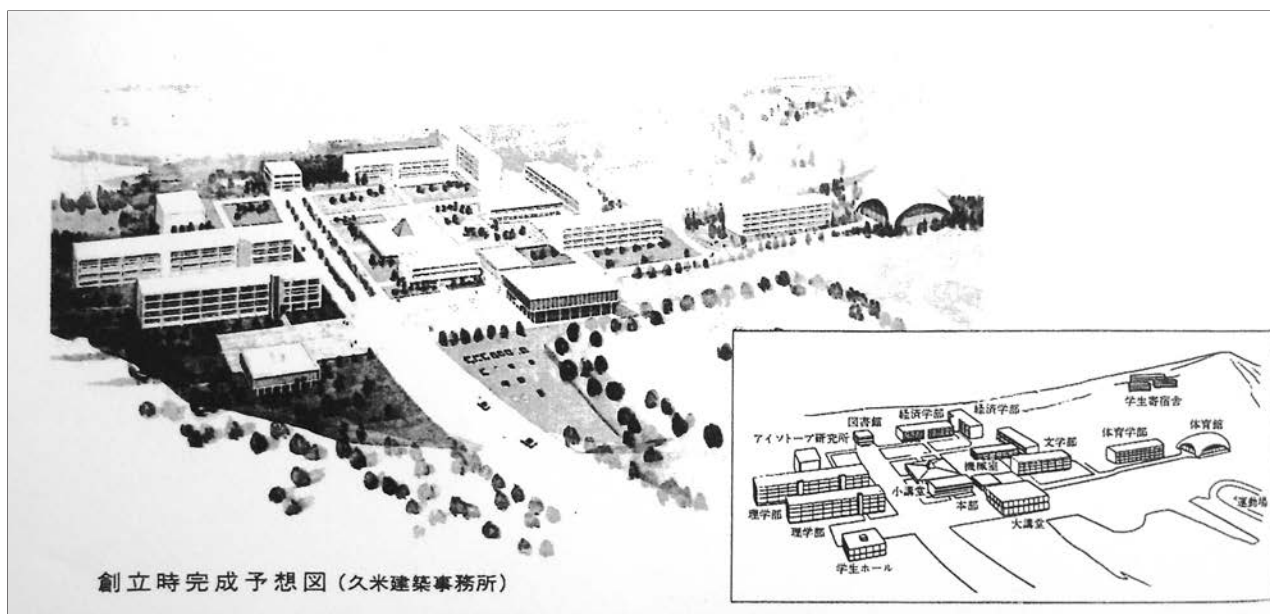


図1 キャンパスの俯瞰図

追記

水田美術館（坂戸キャンパス）で令和6年7月7日から8月30日に開催した「福島尚鉄道画展」に東武鉄道社内報「交通東武」No445（昭和40年2月28日）が見開きで展示してあり、そこに城西大学の開校記事がありました。東武鉄道もお客様増加に期待していたのでしょう。

当時はまだ町制だった坂戸市はどうだったのでしょうか。開校前後に発行の『広報さかど』をみましたが、城西大学については何も見つけられませんでした。唯一、昭和40年11月号に17号台風で災害を受けた多和目橋の写真がありました。南から北方向へ撮った写真で、今ならば18号館や21号館が見えるだろう所には林があるだけで、城西大学の存在にもふれていません。



図2 昭和41年の城西大学。城西歯科大学（現 明海大学歯学部）建設でなくなった道がよく分かる。1号館の右にある道を挟んで見える数軒は女子寮。多和目橋は昭和40年8月の台風17号で一部が落ちてしまった。